

Olympic

オリンピック教育

Vol.14 2025/04-2026/03

Education



筑波大学オリンピック研究教育センター
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

目次

はじめに

第14巻の刊行によせて	齊藤まゆみ ...	2
-------------------	-----------	---

研究・活動報告

東京2020大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2025年度）	宮崎 明世 ...	3
ベルギー・ゲント大学での学術集会	大林 太朗 ...	10

実践報告

附属小学校	眞榮里耕太 ...	12
附属中学校	鈴木 博貴 ...	14
附属高等学校	鮫島 康太 ...	18
附属駒場中・高等学校	岩田 大輝 ...	20
附属坂戸高等学校	渡會 愛梨 ...	22
附属視覚特別支援学校	山本 夏幹 ...	23
附属聴覚特別支援学校	苦瓜 道代 ...	24
附属大塚特別支援学校	宇佐美太郎 ...	26
附属桐が丘特別支援学校	原 怜子、永田 悠祐、福西 八光 ...	32
附属久里浜特別支援学校	石川 千尋 ...	35

センター長 齊藤 まゆみ

清水諭前センター長（現・学長特別補佐、特命教授）の後任として、新たにセンター長を務めることとなりました齊藤です。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年は、日本で初めて東京 2025 デフリンピックが開催され、本学の学生・生徒、OB・OG が目覚ましい活躍を見せました。また、今秋の愛知・名古屋 2026 アジア・アジアパラ競技大会〔齊藤 まゆみ 1.1〕は、アジアの国・地域とともにオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを発展させる重要な機会です。本センターとしても、これらの大会を研究・教育・実践へとつなげ、次世代に継承される価値を生み出していきたいと考えています。

2025 年 4 月のセンター化以来、従来のオリンピック・パラリンピック教育に加え、アダプテッド体育・スポーツ、スポーツ・インテグリティ、アンチ・ドーピング、平和構築、国際開発などへ活動領域を広げてきました。

今後は、学内組織や附属学校群、国内外の大学・研究機関・国際機関、関連大学院教育プログラムの修了生との連携を深め、研究成果の社会還元と、若い世代がスポーツの理念や社会的価値を学ぶ機会の充実に努めてまいります。本刊『オリンピック教育』第 14 巻が、新たな対話を生み、研究・教育実践のさらなる発展につながることを願っています。末筆ながら、日頃より本センターの活動にご理解とご協力を賜っている皆様に、心より御礼申し上げます。

東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2025 年度）

筑波大学オリンピック研究教育センター・筑波大学体育系 宮崎 明世

I. はじめに

2021 年夏に開催された、東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会に向けて、全国で展開されたオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）の大会後の実態とその影響について、2022 年から継続調査を行ってきた。大会の終了後 5 年の間に、2024 年夏にはパリ大会、2026 年冬にはミラノ・コルティナ冬季大会が開催された。大会終了から時間がたつにつれて、教育活動の実施は減少し、大会の影響も薄れることが予想されるが、2024 年度調査ではパリ大会の影響か、回答校数が増加し、教育活動の実施率も前年度より向上した。このように、大会の成果や影響について継続的に調査を行うことには意義があり、それによって時間の経過に伴う課題も見えてきた。

本稿では、東京 2020 大会後の学校におけるオリ・パラ教育の実態と、大会による影響を明らかにすることを目的として実施している継続調査について、2025 年度に行った調査結果を報告するとともに、これまでの調査結果との比較から大会後のレガシーについて検討する。

II. 方法

1. 対象

本調査では、スポーツ庁の全国オリンピック・パラリンピック・ムーブメント展開事業に参加した自治体のうち、2024 年度の調査で対象とした 4 県の公立小・中・高・特別支援学校を対象とした。2024 年度は 5 県であったが、その内 F 県は県の事業が終了したため、調査の協力を得ることができなかった。

回答校数は A 県 322 校、B 県 354 校、C 県 76 校、D 県 184 校であった。昨年度と比較すると、A 県、D 県の回答校数は少なかったが、B 県は変わらず、C 県はむしろ増加した。その結果、合計数は昨年度とほぼ同様であった。回答校の校種の占める割合は、小学校 5・6 割程度、中学校 3 割弱、高校が 1 割前後とすべての自治体で例年と同様であった。

表 1. 各県の回答校数と内訳

	A		B		C		D		合計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
小学校	200	62.1	187	52.8	41	53.9	114	62.0	542	37.7
中学校	91	28.3	102	28.8	22	28.9	47	25.5	262	34.5
義務教育学校	7	2.2	4	1.1	1	1.3	2	1.1	14	42.4
高等学校	11	3.4	52	14.7	9	11.8	13	7.1	85	25.8
特別支援学校	13	4.0	9	2.5	3	3.9	8	4.3	33	38.4
合計	322		354		76		184		936	
昨年度回答校数	417		365		55		289		926	

2. 調査期間とデータの収集

2025 年度の調査は昨年度と同様に 7 月から 9 月に実施した。依頼方法についてもこれまでと同様、各県の教育委員会を通して調査を依頼し、Google Form を用いてオンラインにて各学校の個別解答とした。また、同一校の中で複数の回答があった場合は、学校ごとの回答とするために内容をまとめて 1 校とした。

質問内容については、2024 年度の調査で前年度までと若干の変更を加えたため、今年度は 2024 年度と同様とした。具体的には、2025 年度のオリ・パラ教育の実態として、オリンピックやパラリンピックに関わる題材を教科教育、学校行事、講演や体験活動、福祉・人権教育のそれぞれで活用しているかどうかを尋ねた。また、オリ・パラ教育の実践について、教育活動を実施したかどうか、実施した場合はその内容、実施しなかった場合はその理由、オリ・パラ教育の継続のために必要な支援等を尋ねた。さらにオリ・パラ教育の影響について、児童生徒の様子、学校の取り組み、地域や教員同士の関わりのそれぞれに、大会や教育活動の影響と考えられることはあるかを尋ねた。

Ⅲ. 結果と考察

1. オリ・パラ教育活動の実態

1-1. 教科教育での活用（表2）

教科教育におけるオリ・パラに関わる教材の活用について尋ねた。各県の対象のうち、A県 73.6%、B県 48.9%、C県 71.1%、D県 64.1%の学校が活用していると回答した。自治体によって違いはあるものの各県ともに約半数を超え、自治体によっては7割を超える学校で活用されていた。中でも、「体育・体育理論」「道徳」における活用が多く、各自治体で「体育・体育理論」では6-7割、「道徳」では5-6割の学校が活用していた。それに次いで「総合的な学習／探求の時間」、さらには「国語」「外国語」「社会」「芸術」などの教科においても活用されていた。

このことから、昨年度の調査結果と同様、多くの教科において教材として活用されており、教科教育の中に位置付けられることが明らかになった。さらなる定着を図るためには、教科ごとの学習内容に合った、効果的な教材の開発が必要であると考えられる。

表2. オリンピック・パラリンピックに関わる題材の教科教育における活用

	A県		B県		C県		D県	
	数	%	数	%	数	%	数	%
活用している	237	73.6	173	48.9	54	71.1	118	64.1
活用していない	85	26.4	149	42.1	22	28.9	67	36.4
合計	322		354		76		184	

1-2. 学校行事での活用（表3）

学校行事におけるオリ・パラに関わる題材の活用について尋ねた。学校行事で活用している学校は、対象校のうちA県 16.1%、B県 13.0%、C県 19.7%、D県 12.0%といずれも1-2割の学校が活用していた。その内容のほとんどが「運動会・体育祭」で、次いで「交流会」が多かった。「学園祭・文化祭」での活用は各自治体ともに1割前後で、ほとんど行われていない自治体もあった。他には「特別活動」「人権教育集会」「式典における講話」などで、昨年までと同様の傾向であった。大会開催までは運動会をオリ・パラに関連させて開会式や種目を工夫する事例が見られたが、そのような活用の仕方は減少していると考えられる。

表3. 学校行事におけるオリンピック・パラリンピックの活用

	A県		B県		C県		D県	
	数	%	数	%	数	%	数	%
活用している	52	16.1	46	13.0	15	19.7	22	12.0
活用していない	270	83.9	276	78.0	61	80.3	163	88.6
合計	322		354		76		184	

1-3. オリンピック・パラリンピックに関わる講演や体験活動（表4）

オリンピック・パラリンピックに関わる「講演や体験活動」を行っているかを尋ねた。その結果、A県 23.0%、B県 30.8%、C県 21.1%、D県 21.2%の学校が行っていると回答した。B県では大会終了後も継続して県が主体となったパラアスリート派遣事業を行っており、それが反映された結果であった。一方、B県以外では2割程度にとどまった。昨年度はB県以外でも比較的多く行われていた自治体もあったが、今年度はすべての自治体で同程度の実施率であった。その内容として、B県では講演と体験活動が多く、その他の自治体では授業や部活動を対象とした「スポーツ指導」が多く挙げられた。すでに行われている授業や特別活動を利用して、講師を招くという方法がとられており、これも一つの定着の形であると考えられる。また、体験活動を重視する傾向はこれまでと同様であった。

表4. オリンピック・パラリンピックに関わる「講演や体験活動」の実施

	A県		B県		C県		D県	
	数	%	数	%	数	%	数	%
行っている	74	23.0	109	30.8	16	21.1	39	21.2
行っていない	248	77.0	213	60.2	60	78.9	146	79.3
合計	322		354		76		184	

1-4. 福祉・人権などの教育の題材として、パラリンピックを活用しているか（表5）

『福祉』『人権』などの教育の題材として、パラリンピックや障がい者スポーツを活用しているかを尋ねた（表5）。A県52.2%、B県55.6%、C県57.9%、D県42.9%の学校が活用していると回答した。それぞれの自治体で昨年度とほぼ同様の割合で、5割を超える学校が活用していた。「福祉」「人権」の題材は、教科としては道徳、さらに独立した学習として扱われることもある。これまでの調査の結果からも、パラリンピックの題材が学習内容に合致しており、児童生徒の学習に適していると考えられる。

継続調査から、大会終了後には教育課程に定められた教科、さらには道徳や人権・福祉の教材として活用されていることが明らかになった。学習に効果的な教科教材として活用されることが定着していけば、それ自体がレガシーと言え、今後の継続も可能であろう。そのためには、学習内容の習得に適した、オリ・パラに関する教材を開発していくことが求められる。

表5. 『福祉』『人権』などの題材としてのパラリンピックや障がい者スポーツの活用

	A県		B県		C県		D県	
	数	%	数	%	数	%	数	%
活用している	168	52.2	197	55.6	44	57.9	79	42.9
活用していない	154	47.8	157	44.4	32	42.1	106	57.6
合計	322		354		76		184	

2. 今年度（2025）のオリ・パラ教育の実施とその内容

2-1. 教育活動の実施（表6）

今年度（2025）のオリ・パラ教育の実施について、教育活動を行ったかどうかを尋ねた（表6）。「すでに行った、行う予定がある」と回答したのは、A県43.2%、B県47.5%、C県46.1%、D県42.4%で、全体の平均は44.9%であった。各自治体の実施率は昨年とほぼ同様で40～50%程度の実施率であった。本調査の回答校の教育活動実施率は、2021年度から2023年度にかけて低下する傾向にあったが、2024年度には維持・増加傾向を示した。さらに今年度は昨年度と同程度の実施率を示し、実施率は維持された。実施率の維持には、2024年夏にパリ大会、2026年冬にミラノ・コルティナ冬季大会が開催されたことも影響している可能性がある。東京大会の終了から時間が経過しても、オリ・パラ大会が開催されるたびに選手の活躍がメディアで報道されることで、児童生徒や教員の興味関心が高まるものと思われる。

表6. 今年度オリ・パラ教育を行ったか、または行う予定があるか

	A県		B県		C県		D県		合計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
すでに行った・行う予定がある	139	43.2	168	47.5	35	46.1	78	42.4	420	44.9
行う予定はない	55	17.1	81	22.9	12	15.8	64	34.8	212	22.6
未定	128	39.8	105	29.7	29	38.2	43	23.4	305	32.6

2-2. 具体的な活動内容（表7）

今年度教育活動を行った学校に対して、具体的な活動内容を尋ねた。最も多く行われていたのは授業での活用で、その内訳として「体育・体育理論」「道徳」が多くを占めた。その他には「総合的な学習・探求の時間」「社会科」、その他の科目における活用もあった。次に多かったのは「講演・体験」で、アスリート派遣事業を行っているB県では5割を超える学校で行われてい

た。それ以外の自治体でも2割前後で活用されており、体験が重視されていることはこれまでと同様であった。その他には数は少ないものの、学校行事やオリ・パラに関する学習、特別支援学校などとの交流、スポーツ観戦なども挙げられた。2025年秋には日本でデフリンピックが開催され、それを学習の機会として捉えた例もあった。このような、体験を重視する姿勢やその具体的な方法を知っていること、世界的なスポーツ大会の開催を学習の機会をとらえることといった、学校や教師の知識や運営能力がレガシーの一つと考えられる。

表 7. 2025 年度の活動内容

活動内容	A(n=139)		B(n=168)		C(n=35)		D(n=78)	
	数	%	数	%	数	%	数	%
授業での活用								
道徳（人権・福祉）	45	32.4	29	17.1	11	31.5	19	24.4
体育・体育理論	35	25.2	28	16.7	10	28.5	13	16.7
総合的な学習／探究	13	9.4	0	0.0	1	2.9	3	3.8
社会科	3	2.2	1	0.6	0	0.0	5	6.4
その他（国語・英語、数学、自立活動）	0	0	3	1.8	4	11.4	4	5.1
講演・体験	36	25.9	90	53.6	6	17.1	25	32.0
学校行事（運動会）／特別活動	2	1.4	9	5.4	4	11.4	0	0.0
学習（種目・選手・価値・多様性等）	9	6.5	0	0	1	2.9	5	6.4
交流（校種間、特別支援、留学生）	1	0.7	7	4.2	1	2.9	5	6.4
観戦（デフリンピック）	0	0.0	0	0.0	0	0.0	9	11.5
その他（体力向上、地域行事）	1	0.7	0	0.0	0	0.0	2	2.6

3. 今年度（2025 年度）オリ・パラ教育を実践しない理由（表 8）

今年度オリ・パラ教育を実践しないと回答した学校に対して、その理由について尋ねた。各自治体ともに最も多かったのは「時間の不足」であった。次いで「教育課程に位置付けられていない」「余裕がない」「内容が分からない」「優先順位が低い」などの回答があった。これまでと同様の結果であったが、「必要性がない」「昨年度行った、開催年でない」という回答も見られた。学校の忙しさと、意義の周知の不足が反映された結果であった。

表 8. オリ・パラ教育を実践しない理由

内容	A県 (n=55)		B県 (n=81)		C県 (n=12)		D県 (n=64)	
	数	%	数	%	数	%	数	%
時間の不足・計画が困難	11	20.0	17	21.0	3	25.0	19	29.7
教育課程に位置付けられていない	6	10.9	6	7.4	1	8.3	17	26.6
余裕がない	8	14.5	2	2.5	—	0.0	5	7.8
内容が分からない	5	9.1	3	3.7	1	8.3	3	4.7
優先順位が低い（行事を精選）	3	5.5	9	11.1	—	0.0	1	1.5
昨年度行った・開催年でない	2	3.6	8	6.2	—	0.0	3	4.7
必要性がない	—	0	4	4.9	—	0.0	2	3.1
教材の不足	2	3.6	—	0.0	—	0.0	1	1.5
その他	5	9.1	6	7.4	4	25.2	4	6.2

教員の知識がない、関連する行事がない、別の形で実施、選手を呼ぶ手立てがない、予算がない、児童の実態に合っていない

4. 必要な支援（表 9）

オリ・パラ教育を継続するために必要な支援について尋ねた。各自治体ともに最も多かったのは、「教材・教具・資料・情報の提供」で、昨年度と同様の結果であった。次いで「講師の派遣、講演会の実施」や講師に留まらない「人材・コーディネーターの派遣」という回答も見られた。さらには「指導計画・実践例の紹介」「教育課程への位置づけ」「意義の周知・啓発」「予算的補助」「児童生徒の興味関心・身近に感じる仕組み」「用具の貸し出し」などはすべての自治体で挙げられた。先述した、教育活動を行わ

ない理由と必要な支援は表裏の関係にあるが、学校現場の時間的な余裕のなさはすべての理由や支援に関連していると考えられる。具体的にはすぐに使える教材や情報を提供することや、教員が教育活動を企画運営する負担を減らすことなどが求められている。大会から時間が経過するにつれて、意義の周知や必要性、身近に感じる工夫も必要といえる。

表 9. オリ・パラ教育を継続するために必要な支援（上位抜粋）

回答	A県 (n=322)		B県 (n=354)		C県 (n=76)		D県 (n=184)	
	数	%	数	%	数	%	数	%
教材・教具・資料、情報	119	37.0	85	24.0	24	31.6	60	32.6
講師の派遣、講演会の実施・講師派遣システム	39	12.1	79	22.3	11	14.5	44	23.9
指導計画・実践例	21	6.5	14	4.0	7	9.2	10	5.4
教育課程への位置づけ	14	4.3	17	4.8	4	5.3	15	8.2
意義の周知・啓発	19	5.9	18	5.1	5	6.6	7	3.8
予算的補助	13	4.0	26	7.3	—	0.0	8	4.3
児童生徒の興味関心・身近に感じる仕組み	18	5.6	14	4.0	7	9.2	5	2.7
用具・用具の貸し出し	8	2.5	22	6.2	6	7.9	5	2.7
時間的余裕・教育内容の精選	8	2.5	11	3.1	3	3.9	18	9.8
人材派遣・コーディネーターの派遣	19	5.9	16	4.5	3	3.9	—	0.0

5. オリ・パラ教育の影響

5-1. 児童生徒への影響（表 10）

児童生徒の様子に、東京 2020 大会の影響と考えられることはあるかどうか尋ねた。「ある」と回答したのは A 県 26.7%、B 県 13.3%、C 県 15.8%、D 県 15.2%であった。A 県は 3 割程度、その他は 1 割 5 分程度の学校が、影響があると回答したが、「わからない」と回答した学校がすべての自治体で 5-6 割を占めた。「ない」と回答した学校は全体として昨年度よりも少なく 2 割程度であったが、対象校が異なるため単純には比較できない。

児童生徒に大会の影響と考えられることが「ある」と回答した学校に、その内容を尋ねた。全体で最も多かったのは「スポーツへの関心が高まった」ことであった。次いで「スポーツへの参加が増えた」「知識が増えた」「身近に感じるようになった」「意欲が向上した」などはすべての自治体で挙げられた。占める割合は昨年度までとは異なるが、影響として挙げられる項目は、これまでと同様であった。

表 10. 児童生徒への影響

	A県		B県		C県		D県	
	数	%	数	%	数	%	数	%
ある	86	26.7	47	13.3	12	15.8	28	15.2
ない	53	16.5	82	23.2	18	23.7	50	27.2
わからない	183	56.8	225	63.6	46	60.5	107	58.2
合計	322		354		76		184	

5-2. 学校の取り組みへの影響（表 11）

大会開催以降に、学校の取り組みへの影響があったかどうか尋ねた。影響が「あった」と回答したのは、A 県 22.0%、B 県 23.7%、C 県 26.3%、D 県 25.5%で、すべての自治体で 2 割を超える学校が、影響があったと回答した。各自自治体ともに昨年度と比較しても大きな差は見られなかった。

学校の取り組みに影響があったと回答した学校に、その内容を尋ねた。その結果最も多かったのは、各教科の授業やクラブ活動等に新たな種目や取り組みを導入したことで、昨年度と同様であった。次いで「学校行事・運動会」「用具の購入」などが挙げられた。新たな種目の導入には、バラスポーツが多く、その認知や興味も回答として挙げられた。

表 11. 学校の取り組みへの影響

	A県		B県		C県		D県	
	数	%	数	%	数	%	数	%
ある	71	22.0	84	23.7	20	26.3	47	25.5
ない	251	78.0	270	76.3	56	73.7	138	75.0
合計	322		354		76		184	

5-3. 教員間や地域との関わりへの影響（表 12）

学校の教職員間や地域との関わりに、大会の影響があったかどうか尋ねた。「あった」と回答したのは A 県 12.4%、B 県 12.1%、C 県 19.7%、D 県 14.1%であった。この割合は児童生徒への影響よりも低く、学校の取り組みよりもさらに低い割合であることはこれまでの調査と同様であった。

大会の影響があったと回答した学校に対して、どのような内容かを尋ねた。最も多かったのは、「関心の高まり」「話題に上がることが増えた」という回答で、これまでと同様であった。次いで「交流の促進」「地域との連携」「学校行事」などが挙げられ、「パラ競技の知識・普及」という回答もほとんどの自治体で挙げられた。

表 12. 教員間や地域との関わりへの影響

	A県		B県		C県		D県	
	数	%	数	%	数	%	数	%
ある	40	12.4	43	12.1	15	19.7	26	14.1
ない	282	87.6	310	87.6	61	80.3	159	86.4
合計	322		354		76		184	

VI. まとめ

本稿では、東京 2020 大会後の学校におけるオリ・パラ教育の実態と、大会による影響を明らかにすることを目的として実施している継続調査について、2025 年度に行った調査結果を報告した。調査開始以降、対象とする自治体を増やして 2024 年度には 5 つの自治体が対象であったが、今年度はその内 1 つの自治体から回答を得ることができなかった。大会が終了して時間が経過するとともに、社会の関心が薄れ、教育に関する関心や必要性も低下することが、本調査のさまざまな項目の結果からも見て取れた。回答校数は大会終了から年を追って減少したが、2024 年度には一転して増加した。2024 年夏にパリ大会が開催されたことが影響していると考えられたが、今年度は前年度と同程度の回答校数であった。このことは、2026 年 2-3 月にミラノ・コルティナ冬季大会が開催されたことによるものかどうかは不明だが、大会が開催されるたびに選手の活躍が大きく報道され、社会の関心が寄せられることは、児童生徒にとって身近に感じる話題・教材としての有用性に影響を与えられられる。今後もおよそ 2 年に 1 度開催される大会を契機に教育活動のチャンスが巡ってくるとすれば、その際に活用できる教材や情報を発信することには意義があると考えられる。また、必要な支援として挙げられた用具や関係機関との連携については、東京 2020 大会で培われた関係や組織の継続的な活用が求められる。

東京 2020 大会の児童生徒、学校の取り組み、地域や教員間それぞれの観点から、これまでと同様に一定程度的影響が認められた。このことに関して、大会終了から時間が経過して、結果の解釈が難しくなってきたと感じている。つまり、「現在も続いている」影響なのかを明確に示していないためである。児童生徒が成長して、先の校種に進学することで長期にわたる縦断的な影響の検討には限界がある。しかしながら、教科教育の教材としての活用や、可能な形で外部講師を招くこと、これまでに培った関係を生かして何らかの活動を行うこと自体が学校の取り組みに対する影響と考えられる。地域との連携は少子化の進む現状では今後必須になると考えられ、オリ・パラやスポーツをそのきっかけとすることが可能である。今後も状況に合わせた調査を行い、検討を重ねる必要がある。

<参考文献>

- 1) 宮崎明世（2023）東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2022 年度）. オリンピック教育 vol.11, 3-8.
- 2) 宮崎明世（2024）東京 2020 大会後のオリンピック・パラリンピック教育の実態と大会後のレガシーに関する調査報告（2023 年度）. オリンピック教育 vol.12, 3-7.

ベルギー・アントワープ大学での学術集会

筑波大学体育系助教 大林 太郎

2026年2月18日から20日にかけて、ベルギーのアントワープ大学（Ghent University）で開催された Japan, Belgium, and International Sporting Exchange The 1920 Antwerp Olympic Games の学術集会に出席した。ホストは日本の身体文化・スポーツ史研究で著名なアンドレアス・ニーハウス教授で、日本からも下記のパネルにある研究者・学生が参加し、主に1920年のアントワープ五輪と日本に関連する研究成果が報告された。

大林は2025年3月に公開されたジャーナル論文の内容をベースに、同五輪に参加した日本選手団の主将：野口源三郎の手記資料の分析を通じた当時のアスリートの経験について報告を行った。議論では、あえて遠回りとなる米国・英国廻りで渡航した日本選手団が何を見て何を持ち帰ったかに関する質疑があり、またベルギー・アントワープ現地での雑誌・新聞の史料収集に関する新たな糸口が見出された。

ちなみに、同大学は元IOC会長のジャック・ロゲ氏の出身校であり、その名を冠するIOC認可のOSRC：Jacques Rogge Olympic Studies Centre (JROSC)：2023年創設がある。この度の訪問をもとに、筑波大学COREとの将来的な共同研究やプロジェクトの足掛かりとしたい。

プログラム：

Wednesday, February 18

10:00-10:15 Introduction of the conference

Andreas Niehaus (Ghent University)

Ishizaka Yūji (Nara Women's University)

Yabu Kōtarō (Ritsumeikan University)

10:15-11:00

Bram Constandt (Ghent University)

Hosting the Olympics in Times of a Pandemic: Historical Insights from Antwerp 1920

11:00-11:45

Ishizaka Yūji (Nara Women's University)

The Emergence of Japan's Olympic System: From Antwerp 1920 to Tokyo 2020

(11:45-12:00 coffee break)

12:00-12:45

Hoshino Utsuru (Konan University)

Sports and International Relations after the World War I: A Japanese Perspective

12:45-13:45 lunch break

13:45-14:30

Shimomura Mitsutoshi (Kawasaki City Museum)

The Thought and Action of Athlete Noguchi Genzaburō: 1888-1920

(14:30-15:00 coffee break)

15:00-15:45

Yabu Kōtarō (Ritsumeikan University)

The Phantom Olympian: Or Why Was Sakamoto Yuzō Stripped of His Eligibility?

15:45-16:30

Ogawa Shōta (Gifu Pharmaceutical University)

The Development of Sports Policy in Japan after the Antwerp Olympic Games and the Financing of Olympic Participation

16:30 Reception

Thursday, February 19

9:35

Welcome Note Deputy Chief of Mission, Minister Nishino Shuichi

9:40-10:30

Herwig Reynaert (Vice-rector, Ghent University)

Olympians in Flanders Fields (1908-1920)

(10:30-11:00 coffee break)

11:00-11:45

Ōbayashi Tarō (University of Tsukuba)

The Japanese Delegation's Journey to the 1920 Antwerp Games: The Report of Team Captain Noguchi Genzaburō's as Historical Source

11:45-12:30

Wada Kōichi (Kobe University of Future Health Sciences)

The 1920 Antwerp IOC Session and the 5th Far Eastern Championship Games (Shanghai, 1921): The Standoff between the IOC and the YMCA over Kanō Jigorō and Olympism

(12:30-13:30 lunch break)

13:30-14:15

Sige Cleve (Ghent University Student)

Belgium-Japan Relations and Japanese Athletes in the Belgian press

14:15-15:45

Ritsumeikan University Students presentations)

(15:45-16:15 coffee break)

16:15-18:30

Kyushu University Students presentations

Friday, February 20

Field trip Antwerp Stadium



写真：ニーハウス教授によるあいさつ

本実践では、世界陸上 2025 東京大会を題材としたものである。そのねらいは

- ①陸上競技について理解を深めること（世界記録を中心に）
- ②様々な国に目を向けること

1. 国際大会が身近な場所で

地元開催であった東京オリンピックは、新型コロナウイルス感染症の影響によって無観客のまま実施された。身近な場所で開催されていたにもかかわらず、各種報道によって情報を得るという状況であった。国際大会を肌で感じることができるせっかくの機会であったが、他の国で開催されているのとはほぼ同じ状況だった。

今回は、東京オリンピック以降で開かれるスポーツの国際大会で最大級のものであった。国立競技場は、学区内にあることで子どもたちにとっても身近な場所であった。

また、本校では毎年運動会に熱中する姿がある。そのため、それに近い陸上競技についても興味を持ってもらいたいと考えた。

2. 陸上競技の魅力は

陸上競技は、勝った負けたという他者との競争だけではなく、自分自身の記録であったり、これまでの世界記録との競争だったという側面もある。

今回は数ある種目から跳躍種目と投てき種目について子どもたちに紹介した。

3. 実際の流れ

- ①まずは、100 m 走の男女の記録を紹介

女子の世界記録については、約 40 年近く記録が破られていない

- ②さまざまな国から

陸上競技は、個人の力で勝負することができるのでチームスポーツとちがい、様々な国から参加する。

- ③走り高跳びの世界記録

男子の世界記録は 2m45cm ひもを張って視覚的に高さを知ることと身近な具体物で高さを確認した。通用門にある守衛さんの詰め所が同じくらいの高さである。

- ④投擲種目（実物を見せながら）

陸上競技を知っている子でも実物を見たことがあることは少ない。

その中でも投擲の道具は実際に触れる機会もほとんどない。そこで記録とともに実物を見せながら話をした。

まずは砲丸

子どもたちは思っているよりも重いことに驚いていた。小学生にとって重いので代表の 6 年生が実際に持つだけにした。

次にやり

2 年生 2 人がやりをもって登場

これは、予想よりも軽かった。

やり投げの世界記録は 98 m なので第二運動場の端から端まで投げるという記録を聞いて驚いた様子であった。

ハンマー

次にハンマーである。とってとワイヤー砲丸がくっついて、回転する

円盤

最後は円盤である。これも思ったよりも小さいことに驚いていた。

5. 世界記録に挑戦

走り幅跳びの世界記録は前回の世界陸上東京大会で出されたものであった。

マイクパウエル選手の当時の映像を交えながら紹介した。

そしてお手伝いに来ている2年生と6年生の6人が立ち幅跳びで世界記録に挑戦した。

6. 実際に触れてみて

2年生の1クラスに実際に投擲種目の道具に触ってみる機会をもった。

7. 世界陸上を

家族・友人同士・学級の有志などで国立競技場を訪問する子もいた。テレビ等によって観戦するなどそれぞれの形で世界陸上に触れていた。

結果に目をむけることに併せて様々な国の選手が参加していることにも注目することができていた。

附属中学校における実践報告―戸邊選手と鳥居選手による特別授業―

附属中学校 鈴木 博貴

1. 概要

本年度はオリンピック・パラリンピック教育の一環として、走り高跳び（陸上競技）の日本記録保持者であり、2020年東京オリンピック日本代表の戸邊直人選手、2024年パリパラリンピックブラインドサッカー日本代表の鳥居健人選手を招聘し、講演（実演・実技を含む）を開催した。それぞれの講演会の前には、講師の方々のお話が生徒の日常生活に関連するように、事前学習を行った。事前学習や講演会の開催によって、生徒がオリンピック・パラリンピックの意義や価値をより身近に感じることができ、よりよく生きていくための新たな視点が得られた貴重な機会となった。

2. 実践報告

(1) 戸邊直人選手による講演会（実演を含む）

戸邊選手は競技者としてオリンピック出場や日本記録樹立といったご経験があるだけでなく、研究者としても筑波大学で博士号を取得しており、競技者と研究者の両方で卓越した実績を有する方である。講演会では、オリンピック出場や日本記録樹立、研究と競技がどのように結びついているかといった戸邊選手のご経験を踏まえて、オリンピックの価値についてお話しいただいた。また、当日は走り高跳びを実演していただき、生徒は戸邊選手の凄さや走り高跳びの迫力を肌で感じることができた。

対象：第1・2学年（各学年で1時間ずつ実施）

事前学習：事前学習ではこの講演会の目的を明確にし、戸邊選手のご経歴の紹介や問いについて自分の考えをまとめる学習を通して、講演会の充実を図った（図1）。

講演会の目的

戸邊さんのご経験やオリンピックについてのお話から、スポーツの価値・オリンピックの価値について理解を深め、自分自身のスポーツへの関わり方やより良い生き方について考える

事前学習①：以下の問いについて自分の考えをまとめよう

▶東京オリンピックやパリオリンピックであな
たの心に残っていることは何ですか？

▶あなたが考えるオリンピックの価値は何で
すか？

▶あなたにとってスポーツとは？

戸邊直人



▶ 筑波大学大学院修了（博士号）
博士論文：走高跳のパフォーマンス獲得に関わる技術要因の検討

▶ 走高跳 日本記録保持者（2m35cm）
▶ 東京2020オリンピック日本代表
▶ 世界陸上日本代表（2015年、2019年）

▶ アジア・オリンピック評議会 アスリート委員会委員
▶ 日本陸上競技連盟 アスリート委員会委員長
▶ 日本オリンピック委員会 アスリート委員会委員
▶ 東京2025世界陸上財団 理事

事前学習②：戸邊さんへの質問を考えよう

(1) インターネットを使って、戸邊さんのことを調べてみ
ましょう

(2) 戸邊さんに質問したいことを考えましょう。
（事前に考えた質問はロイロノートで提出できるようにし
ます。）

Point…今回の講演会の目的に迫る質問を考えよう

- ・スポーツの価値・オリンピックの価値について理解を深められる質問
- ・スポーツへの関わり方やより良い生き方について考えられる質問

図1. 事前学習の内容

当日の様子：当日は準備（足合わせ）の場面から何度も跳躍を披露していただき、生徒はオリンピックの試技を間近で観ることができた。自分たちより高さのあるバーを軽々と跳び越える姿に、生徒たちからは大きな歓声が上がっていた。その後の講演会では、オリンピックの価値について、戸邊選手のご経験を踏まえてお話しいただいた。実際のご経験を伴って語られたことで、生徒たちはより実感をもって理解することができた。



実演の様子



講演会の様子

生徒の感想（一部抜粋）

- ・「オリンピック」と言われると一見スポーツだけの話のように聞こえるけど、詳しい話を聞くと私たちの日常生活の中に根付いているものだと気づいた。競技自体にも親近感が湧いた。
- ・オリンピックバリューはオリンピックだけでなく自分たちでも今からできることなので日々の生活でさいなことでもいいから意識しながら生きてみたい。
- ・今回の講演会で、戸邊さんがスランプの時のことを話してくださって、スランプのような、なかなか思うように進まない事があっても、諦めずに続けることが大切ということが分かりました。そして、オリンピックバリューは「勝つこと」よりも「人としてどう成長するか」を大切にしていると思いました。

(2) 鳥居健人選手のご講演

昨年度に引き続き鳥居選手に継続的にご講演いただいた。今年度で継続して4年目である。今年度は全学年を対象に、学年に合わせたテーマでご講演をいただいた。

第1学年：学年のテーマである「多様性」を考える授業の一つとして、障がいのある方と共に生きることについて考えを深めることを目的とした。当日は鳥居選手のアテンドや講演会の進行など、全て生徒が担当した。事前学習として、担当した委員が鳥居選手やブラインドサッカーについての資料を作成し、学年の仲間に配付して読んでもらい、鳥居選手への質問を考える機会を設定した。1時間目に講演、2時間目にブラインドサッカーの体験と質疑応答を行った。事前学習に取り組んでいたことと鳥居選手のご講演の素晴らしい内容もあり、生徒は非常に熱心に講演を聴いていた。また、体験ではブラインドサッカーの難しさを実感し、鳥居選手のプレーの凄さを実感していた。最後の質疑応答では、「時間や色をどのように認識しているのか」、「身体の動きを言語化するにはどうすればいいのか」といった質の高い質問が多くみられ、充実した時間となった。

生徒の感想（一部抜粋）

- ・目が見えないということを抱えながら、友達と助け合ったりしたうえで、自分も人の役に立ちたいという話が印象に残った。また、自分を理解して好きな事を貫いているところが私たちの生活にも活かせると思った。
- ・「相手を責めずに、自分に改善点がないかを考える」、「色んなことを知っている人になる」という言葉が印象に残りました。障がいのある方々も共に生活をしていて、それに対して私たちがどう接するべきかを改めて考えていきたいと思いました。
- ・私は協力することと、違いを受け止めることの大切さを学ぶことができました。それぞれの個性を理解し、受け止めることで、みんなが生きやすい世の中になっていくと思いました。いろいろな人がいるということや、その人たちはどんなことが自分とは違うかなどを知り、助け合いを大切に人思いになれるようにしたいと思いました。

第2学年：「挑戦し続けるマインド」をテーマに、担当委員が中心となって、目隠しをした状態でのパスリレーと講演会を進行した。体験と講演会を合わせて1時間で開催した。生徒は、体験ではブラインドサッカーをより身近に感じるとともに、目が見えない事に対する苦労や不安、そして、それを助ける仲間の大切さを実感した様子であった。講演会では、鳥居選手がスランプに陥ったときにそれをどのように乗り越えたかという話が多くの生徒の印象に残り、テーマである「挑戦し続けるマインド」についても理解を深めていた。

生徒の感想（一部抜粋）

- ・本日の講演会で、目が見えないことのハンデを抱えながらも、そのハンデを意識しすぎず、努力をすることで変えていこうとする姿勢がすごいと思いました。
- ・視覚がない状態がどれだけ大変なのかがよく分かりました。講話の中には「ブラインドサッカーが唯一のフィールド上で目の見える人と見えない人が協力する競技だ」というお言葉があり、ブラインドサッカーの競技の魅力に改めて気づくことができました。
- ・悩んでいる時ほどそのことについて考えすぎて、思い詰めてしまいましたが、一旦離れてみるというのも大切だと思えたので常に頭の片隅にいられておきたいです。

第3学年：「ブラインドサッカーを通した他者理解」をテーマに、アイマスクをした状態で脚を使ったパスリレー体験および講演を、体験と講演会を合わせて1時間で開催した。サッカーボールを足で操る形での本格的なブラインドサッカー体験は今回が初めてで、生徒はその難しさを感じるとともに、鳥居選手の凄さを実感していた。講演では、「たとえ相手から傷つけられるようなことがあったとしても、相手を責めるのではなく、相手の立場や自分の非について考え、自分が改善できることに対して努力するという姿勢が大事である」ということを、自身の経験を踏まえ、生徒に響く言葉で分かりやすく伝えてくださり、生徒の心に大きく響いた。



ブラインドサッカー体験の様子



講演会の様子

3. 成果と課題

本年度の取り組みの成果は、生徒がオリンピック・パラリンピック教育を単なるスポーツイベントの理解に留めず、自己の生き方や日常生活に関連付けて考えを深めることができたことである。具体的には以下の通りである。

- ①戸邊選手の講演を通して、生徒たちは「オリンピックバリュー」がトップアスリートだけのものではなく、日々の生活における「あきらめない心」や「人としての成長」に直結していることを学んだ。研究と競技との繋がりや、スランプとの向き合い方など、具体的な経験談に触れることで、自己の在り方を見つめ直す貴重な機会となった。
- ②鳥居選手の講演およびブラインドサッカー体験を通して、障がい者、ハンデとしてではなく一つの個性として捉える視点が養われた。「相手を責めるのではなく、自分に何ができるかを考える」といった鳥居選手の言葉は、生徒たちの対人関係や社会参画の在り方について考える機会となり、共生社会の実現に向けた具体的な姿勢の形成に繋がった。

③事前学習において本質的な問いを考えるプロセスを経たことで、当日の講演内容への理解が深まった。質疑応答においても、アスリートの知見を自身の学びに繋げようとする質の高い対話が見られ、主体的・対話的で深い学びが実現された。

一方で、講演会で得た学びや気づきを一過性のもので終わらせず、学校生活（部活動や行事、日々の学習等）の中でいかに継続して意識させ、行動変容に繋げていくかが今後の課題である。例えば、部活動などで困難に直面した際に、自らを客観的に振り返り、工夫を重ねる姿勢を身につけさせることや、日常の様々な場面で、相手との違いを認め合い、対話を通じて協力し合う雰囲気をつくることなどが考えられる。また、本年度は特別活動に位置付けて講演会を実施したが、保健体育科をはじめ、道徳科や理科など、教科横断的なカリキュラムを編成することで、より多角的な視点からオリンピック・パラリンピック教育を深化させる余地があると考ええる。

附属高校の取り組み

附属高等学校 鮫島 康太

1. 高校一年生女子「柔道単元」を実施

(1) 経緯

附属高等学校においては、オリンピズムに関する内容を日常の教育活動の中に位置付け、意図的・継続的に多様な取組を行っている。これまで、高校第1学年および第2学年の男子生徒を対象として、各学年約15時間の柔道単元の授業を実施してきた。さらに昨年度より、カリキュラムの改編により、高校第1学年の女子生徒に対しても柔道単元を導入した。

本校は「全人教育」を教育理念として掲げ、その実現に向けた教育活動を展開している。また、教員はそれぞれ教科での授業力向上に努めつつ、日常の教育実践にあたってきた。保健体育科においても、特定の運動種目に偏ることなく多様な運動を学習させ、技能の習熟を図るとともに、生涯にわたり運動に親しむ態度の育成を目指してきた。

このような方針のもと、柔道単元の拡充については長らく、慎重な意見が見られた。しかし近年、国立大学において独自性の明確化が求められる中、嘉納治五郎が校長を務めた歴史を有する本校の特色に鑑み、全校生徒が一度は柔道を履修することに教育的意義を見いだすべきであるとの認識に至った。男女共学の高等学校において、全校生徒が柔道を履修する事例は稀であるといえる。本単元は、2026年1月から3月にかけて実施した。奇しくも、柔道発祥の地である講道館において女子部が創設されてから100年という節目の年にあたるものであり、時宜を得た取組であったといえる。授業実施のための柔道衣40人分は、本事業の予算と教科費で購入した。

(2) 内容

なお、昨年度までは器械運動領域において「マット運動」を実施していたが、本単元ではその内容を発展的に整理し、柔道として再編成した。このような経緯から、導入段階ではマット運動や体づくり運動を取り入れ、段階的に抑え技の攻防、受け身の習得、投げ技の習熟へと移行した。

男子の授業においては、抑え技および投げ技の攻防が成立する水準（いわゆる「試合」ができるレベル）まで技能の習熟を図ることを目標として指導計画を構成してきた。一方、女子の授業においては、安全面への配慮をより重視するとともに、基礎体力作りや抑え技中心の内容、また礼法に代表される伝統的な行動様式・所作の理解と習得を重視した内容とした。さらに、単元のまとめとして「形」の体験を位置付けた。この「形」では「投の形」の背負い投げ、「柔の形」の両手取りを行った。

(3) 授業をやってみて

真冬の授業であったため、授業を行う武道館の室温は、一時間目であれば0℃にもなる。ジェットヒーターを90分稼働させて8℃まで上昇させ生徒を待つ。授業の最初は靴下を履いたままでよいとし、柔道衣の下には運動着を着用させた。事前アンケートでは、単元前の印象については、「とても楽しみ」が9.4%、「やや楽しみ」が約32.1%であり、肯定的な印象は合計約41.5%。一方で、「やや嫌だ」が34.0%、「とても嫌だ」が2.8%と、否定的な印象も36.8%となった。また、「どちらでもない」が約21.7%存在し、事前の段階では印象が分散していた。昨年、男子の授業で怪我が続いたことや、そもそも柔道はネガティブな印象が強い種目であることから、授業実施には様々な工夫（とにかく明るく、楽しく、安全に！）を凝らした。

具体的な実施報告は数年後の本校研究紀要に掲載予定である。

単元の中盤、他の教科の教員から、女子生徒たちが次のようなことを言っていると教えてくれた。「鮫島先生は私たちのことを子ども扱いしているんです。男子の授業では厳格な雰囲気緊張感があるのに！私たちもっと激しくやりたいし上手になりたいのに！」。実際、想定以上に生徒の取り組みは積極的で、上達も速かったように感じる。「形」の学習についても、技の理合いを教えるとすぐに理解できる生徒が多かった。結果として授業計画を前倒しで行うことができ、投げ技の攻防まで取り扱うことができた。

単元後の印象は、「とても楽しかった」が69.8%、「やや楽しかった」が29.2%となり、肯定的回答は合計約99.1%。また「どちらでもない」は約0.9%にとどまり、否定的回答は見られなかった。以上より、単元前には不安や抵抗感を背景とした否定的な印象が一定数存在していたものの、単元後にはほぼすべての生徒が肯定的に受け止める結果となった。段階的な指導過程や

安全面への配慮が、生徒の安心感の醸成および肯定的認識の形成に有効に機能したとは考えられるが、嘉納が提唱した柔道の理念やオリンピックを盛り込むことができたかと言われれば、その確証はない。次年度への課題として取り扱いたい。いずれにしても、大きな事故や怪我なく単元を終え、生徒が柔道に親しみ、その楽しさを実感したことは、本実践の一定の成果として評価できる。こうした結果に対し、安堵の念を抱きつつ本年度の実技授業を締めくくるものとなった。

2. その他の取り組み

(1) 「体育理論」および総合的な探究の時間

保健体育の理論授業では、オリンピック・パラリンピックを題材とし、関連する諸課題を扱うことで、生徒の問題意識の育成を図っている。

(2) 筑波スタディ（総合的な探究の時間）

「筑波スタディ」では、1年次に研究手法（データ収集・統計等）を学び予備研究を行い、2年次に課題研究を実施して論文を作成する。なお、オリンピック・パラリンピックやスポーツに関するテーマも毎年複数見られる。

(3) 日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラムへの参加

2年に一度開催される国際ユースフォーラムでは、各国の高校生がスポーツや討議等を通してオリンピックを学ぶ。また、非開催年には国内版フォーラムが実施され、オリンピック理念や社会課題について学ぶ機会が提供されている。本校からも毎年参加者を派遣している。



【写真①】投げ技の様子



【写真②】抑え技の様子

令和7年度 冬季オリンピックに関する教育活動

附属駒場中・高等学校 岩田 大輝

(高校1年 体育理論)

1. 授業実施の目的

本授業は、冬季オリンピックの歴史や競技の特徴を理解し、スポーツの多様性・文化的背景・アスリートの努力や精神性について学ぶことを目的として実施した。

特に、今年度は事前資料として「冬季オリンピックの歴史」「各競技の概要」を整理した教材を用い、映像資料と組み合わせながら、生徒が主体的に興味を広げられる構成とした。

2. 授業内容

1. 冬季オリンピックの歴史の学習

- 1924年シャモニー大会から2026年ミラノ・コルティナ大会までの流れを確認。
- 日本選手の活躍や、競技の追加・ルールの変遷などを紹介。

2. 冬季競技の特徴理解（映像視聴）

- ボブスレー、スケルトン、リュージュ、アルペンスキー、スノーボード、スキージャンプ、カーリング、バイアスロンなど、多様な競技を映像で紹介。
- スピード系・採点系・複合系など、競技特性の違いを比較しながら学習。

3. アスリートの努力・精神性の理解

- 長野五輪スキージャンプ団体の映像などを通じ、プレッシャーや仲間の支え、競技に懸ける姿勢について考察。

4. 講演会（予定）について

- ・田井小百合氏による講演会を予定していたが、事情により中止となった。

3. 生徒の学び・反応

生徒の感想から、以下のような学びが顕著に見られた。

(1) 冬季競技への興味・関心の高まり

- ・「ボブスレーがかっこよかった。いつかやってみたい」
- ・「スケルトンやリュージュなど、知らない競技を知れて面白かった」
- ・「マイナー競技も見てみたいと思った」
- ・「ミラノ五輪を楽しみにしている」

多くの生徒が、これまで触れる機会の少なかった競技に強い興味を示した。

(2) スピード・技術への驚き

- ・「アルペンスキーが時速130kmで驚いた」
- ・「ソリ系の競技は想像以上に速くて怖い」
- ・「スノーボードの回転技が衝撃的だった」
- ・「プロ野球の球速と同じ速さで滑っているのがすごい」

映像を通じて、冬季競技特有の迫力を実感していた。

(3) 競技の難しさ・審判の難しさへの理解

- ・「採点競技は客観的に判断するのが難しそう」
- ・「スケルトンは簡単そうに見えて体重移動が重要だと知った」
- ・「微妙な調整が勝敗を分けることに驚いた」

競技の裏側にある技術・戦略への理解が深まった。

(4) アスリートの努力・精神性への共感

- ・「数秒のために何年も努力しているのが胸に刺さった」
- ・「勝負が決まった後の表情に重みを感じた」
- ・「長野五輪のジャンプ団体に感動した」

スポーツを“結果”だけでなく“過程”から捉える視点が育っている。

(5) 安全性・競技の成り立ちへの疑問・探究心

- ・「危険な競技が多くて驚いた」
- ・「ボブスレーはどうやって生まれた競技なのか気になった」
- ・「雪や氷の状態が結果に影響することを知った」

単なる感想にとどまらず、競技の背景や構造に興味を持つ姿が見られた。

(6) スポーツ文化・社会的背景への視点

- ・「日本ではバイアスロンが普及しにくい理由がわかった」
- ・「世界には多様なスポーツがあると知った」
- ・「周知の重要性を感じた」

スポーツと社会の関係を考えるきっかけにもなっている。

4. 授業の成果

今年度のオリンピック・パラリンピック教育では、以下の点が特に成果として挙げられる。

- ・冬季スポーツへの興味が大きく向上した
- ・競技の技術・戦略・安全性など、多角的に考える姿勢が育った
- ・アスリートの努力や精神性への理解が深まった
- ・ミラノ・コルティナ五輪を自分事として楽しみにする生徒が増えた
- ・スポーツ文化の多様性を学ぶ機会となった

生徒の感想量・質ともに非常に豊かで、授業が深い学びにつながったことがうかがえた。

5. 今後の展望

- ・映像資料に加え、競技体験型の学習（VR等）の導入を検討する。
- ・夏季・冬季の比較や、パラリンピックの視点も取り入れ、より広いスポーツ観を育てる。
- ・来年度は講演会の実施を再調整し、専門家の視点から学ぶ機会を確保したい。



筑坂の実践報告（自主団体と授業から）

附属戸高等学校 渡會 愛梨

本校では、スポーツを通して多様性理解や主体的な学びを育むことを目的に、オリンピック・パラリンピック教育と体育授業を関連付けた教育実践を行っている。特に、生徒主体の活動と授業での学びを結び付けることで、スポーツの価値をより実感的に理解することを目指している。

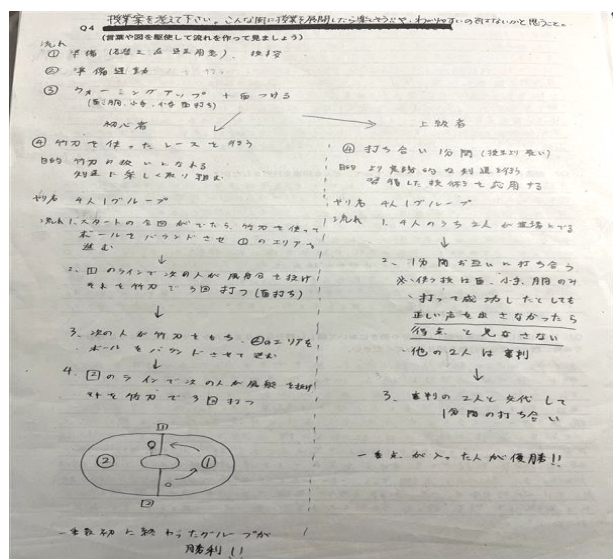
その一つとして、生徒による自主活動団体「オリパラキャラバン」を2020年に発足させた。本団体は現在、1年生から3年生まで計14名で構成され、オリンピック・パラリンピックの理念や競技の魅力を身近に感じてもらうことを目的として活動している。2025年11月には本校武道館においてポッチャ大会を開催した。ポッチャは年齢や障がいの有無に関わらず参加できるユニバーサルスポーツであり、23名が参加した。参加者はチーム対抗の総当たり形式で試合を行い、生徒が中心となってルール説明や審判、運営を担った。初めて競技を体験する参加者も多かったが、スポーツを通して自然な交流が生まれ、共生社会の理念を体験的に理解する機会となった。（写真①）



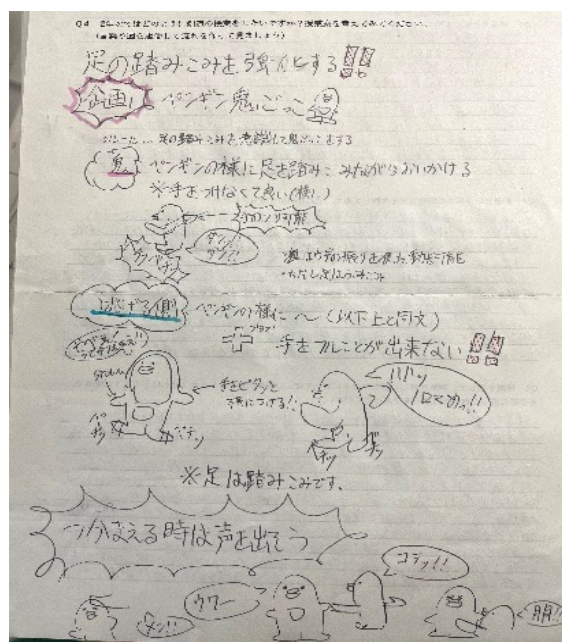
写真①

また、1、2年次選択授業として剣道の授業を実施している。これについては、予算を付けて頂き、剣道用の防具を購入させていただいている。剣道は「剣の理法の修練による人間形成の道である」という理念のもと、技術の習得だけでなく礼儀や心構えを学ぶことを重視している。授業では基本打突（面・小手・胴）の習得から応用技、地稽古へと段階的に学習を進めるとともに、技能試験を通して技能の定着を確認している。さらに、振り返りシートを活用し、生徒自身が課題や改善点を整理することで、思考・判断力や主体的に学ぶ態度の育成を図っている。加えて、礼儀を重んじる姿勢や仲間と協力して学ぶ態度など、剣道の文化的価値を理解する学びも重視している。

なお、剣道授業については、生徒がもっと身近なスポーツ（武道）になるために授業の中でどのような工夫があるかの授業案を考えさせた。（写真②、③）生徒が授業を通して得た学びや気づきを振り返りとしてまとめており、これからの授業の教育的効果についても考察する予定である。



写真②



写真③

ボルダリング体験を中心としたオリパラ教育の実践報告

附属視覚特別支援学校 山本 夏幹

今年度、本校では中学部・高等部の生徒向けにボルダリング体験を行った。特定非営利活動法人モンキーマジックから3名の講師を招き、実施した。体験は2回に分けて実施し、第1回は7月に高等部1年生を対象とした体験、第2回は12月に中学部1年生を対象とした体験を行った。

第1回となった高等部1年生を対象とした体験では、普通科・音楽科生徒16名が体験した。ほとんどの生徒が初めて体験する内容で、視覚に障害のある状態でボルダリングをするための工夫について学んでから実際に体験した。登る際にはガイドと呼ばれる晴眼者が声でサポートする。ガイドには「方向・距離・形」の3つの情報を伝える役割がある。「右上45度の方向、やや遠い位置に、パイナップルの形のホールドがあるよ」といった具体的な指示を頼りに生徒たちは登っていた。実際に体を動かしながら体験をしていくと、はじめは要領を掴むまでに時間を要していたが、徐々に体が慣れてきて、目標としていたゴール地点まで到達する生徒が続出した。課題は6段階＋2コースあり、最難関のコースにチャレンジする生徒もいた。クリアすることはできなかったが、充実した表情を見せていた。「はじめはうまくいかなかったけど、体のバランスを意識して登るとうまくいった」「最難関のコースをクリアできていないから、またチャレンジしたい」などの感想が聞かれ、体験した生徒たちは一様にボルダリングの楽しさを感じることができた様子だった。

第2回となった中学部1年生を対象とした体験では、11名が体験した。生徒の中には小学校時代に別の機会を利用してボルダリングに触れたことのある生徒もあり、それぞれの実態に応じた体験を実施した。第1回と同様、登る際の工夫とガイドの役割を確認して、実際に体験を行った。発達段階にある中学部生徒は高等部生徒に比べ「軽やかに」ホールドを登っていく様子が印象的だった。登っていく未知の怖さよりも自分の手で状況を変えていけることの楽しさが勝っているようで、次から次へと体験していた。体験も終わりに差し掛かるころに「もっとやりたい」「ずっと（体育は）ボルダリングがいい」などの声があり、非常に充実した体験をすることができた。



令和7年度の実践報告

附属聴覚特別支援学校 苦瓜 道代

1. はじめに

本校で継続的に行っている「車いすバスケットボール」(8年目)と「ラート運動」(10年目)の体験を今年度も実施することができた。また、今年度は、11月に東京都で第25回夏季デフリンピック競技大会東京2025の開催にあわせ、特別に予算を組んでいただき「女子デフリンピック代表選手によるサッカー教室」を実施することができた。

2. 車いすバスケットボール

中学部1～3年、高等部普通科1年、高等部専攻科1・2年を対象に、車いすバスケットボール体験会を行った。

中学部と高等部は、保健の授業で介護用の自走式車いすを使用し、自分で座って操作したり、介助者として操作したりし、競技用車いすとの構造の違いを比較し、体感した。専攻科は、保健の授業がないため、体育の授業の中で、介護用の自走式車いすと競技用車いすを並べ、構造の違いを見て学習した。

体験会では、まずは基本操作の練習として、ボールを使わずに前進、後退、方向転換、コーンを用いたジグザク走行の練習に取り組んだ。その後、車いすに座った状態では、ボールがゴールに届かない生徒もいるため、小学生用の5号球を用いてボールを用いてドリブルやシュートの練習に取り組んだ。そして、最後に、試合を楽しんだ。試合は、ボールに触れる機会が増え、接触の危険が減るように、4人対4人の試合を基本として実施した。思い通りに車いすを操作できなかったり、なかなかパスが通らなかったりする場面はあったが、どの生徒も仲間とコミュニケーションを取り、熱心に取り組んでいた。

○生徒の感想

- ・ボールや敵を見ながら車いすを操作するのは難しかった。
- ・2回漕いだらドリブルやパスをしなければならないので、すごく難しかった。
- ・ゴールが高く、なかなかシュートが入らなかった。
- ・車いすスポーツに対する興味が増えた。
- ・車いすを思い通りに動かせなかった。改めて、プロアスリートの技術の素晴らしさを感じた。



写真1. 試合の様子

3. ラート運動

中学部1～3年、高等部普通科1年、高等部専攻科1・2年を対象に、ラート運動体験会を行った。この体験会は10年目となるが、初年度より継続して、筑波技術大学の天野和彦准教授を講師としてお招きしている。ラート運動は、日頃、経験できない姿勢や視界を体験できることから、本校生徒たちの多くがとても楽しみにしている体験である。中学部1年生と高等部専攻科は2時間、その他の学年・学部の子生は1時間体験会を行った。

初めての体験となる生徒は、壁を使い、腕で体を支える感覚を掴む方法から練習を開始し、ラートの縁に乗って重心を真ん中に置きながら歩くトレーニングに取り組みながら、運動中の姿勢や視線の確認を行った。そして、側転、後転、前転、連続技という順番で実技指導が行われた。ラートは、スピードをコントロールできなくなって手を離したり、力任せにラートを回そうとして横揺れが起きたりすると、ラートが横転する危険があるため、必ず教員が付いて練習に励んだ。そのため、待ち時間も多くなってしまうが、他の生徒の様子をよく見てアドバイスしたり、どの順番で連続技に取り組むかを事前に考えたりと、どの生徒も積極的に取り組むことができた。



写真2. 側転の様子

○生徒の感想

- ・怖そうだったけど、天野先生が分かりやすく教えてくれたおかげで楽しくなっていった。またやりたい。
- ・地面にふれていない浮いている感覚が楽しかった。
- ・いつもは使わないところを使ったり、回ったりなどができてとても新鮮で特別な体験だと思った。
- ・今回は3回目だったので、色々な技に挑戦することができて良かった。

4. デフリンピック女子サッカー代表選手によるサッカー教室

小学部1～6年生と高等部普通科2年女子を対象に、本校では初めて、デフリンピック女子サッカー代表選手によるサッカー教室を開催することができた。講師には、本校幼稚部修了生の岩渕亜依選手をお招きした。

ドリブルやコーンの的あて練習では、足の振り方や視線の使い方を指導していただいた。また、試合では、ドリブルでゴール前までボールを運ぶ巧みな技術を披露していただき、サッカー教室を盛り上げていただいた。

デフリンピック代表選手との活動は、児童・生徒にとって貴重な時間となった。また、活躍している卒業生の話は、在校生にとって非常に刺激になり、自分も目標に向かって努力しようという気持ちになった生徒が多かった。

○児童・生徒の感想

- ・今までサッカーに対する苦手意識があったが、一緒にサッカーをしてみたらとても楽しかった。
- ・コツを教えてもらったおかげで、パスのコツも分かるようになった。
- ・代表選手の動きに感銘を受けた。
- ・最後にハイタッチをしてもらいましたが、手を洗ってしまったので、記憶に残しておこうと思いました。



写真3. 的当て練習の様子

5. おわりに

今年度は、デフリンピック代表選手によるサッカー教室を新たに開催することができた。車いすバスケットボールとラート運動は、継続することによって、生徒が次年度への期待を持つことができています。来年度、サッカー教室も引き続き実施できるよう検討していきたい。

知的障害特別支援学校における、阿波踊りを通してろう者との交流と、知的障害に配慮した新しいアダプテッドスポーツの開発と実践

附属大塚特別支援学校 宇佐美 太郎

1. 対象と目標（ねらい）

1) 対象

知的障害のある幼稚部、小学部、中学部、高等部に在籍する幼児・児童・生徒

2) 目標（ねらい）

本校に在籍する生徒は全員、知的障害児・者である。

知的障害という障害の特性上、家庭・学校以外の場所に一人、もしくは友達同士で出かけることは少なく、幼児児童生徒の行動範囲が学校と家庭（最近では放課後デイサービスなどに通っている生徒も多い）のみに限られてしまうことが多い。また、興味関心が偏っていたり、ルールの理解が難しい幼児児童生徒が多く、自ら進んでスポーツに取り組んだり、情報を得たりすることも難しい。そのため健常者と比較すると、スポーツをしたり触れたりする機会は圧倒的に少なく、スポーツに関する知識も少ないと言える。

そこで本年度は、オリンピック・パラリンピック教育を通して、オリンピック・パラリンピックへの興味関心を高めること、将来の健康的な生涯スポーツ社会への参加に向けて、①スポーツへの興味関心を高めること、②様々なスポーツを体験すること、③基礎的運動能力の向上、④自分たちと違う障害を持つ方々との交流を目標に実践を行った。

2. 内容

1) 全校の取り組み「阿波踊りを通してろう者との交流」

本年度は東京でデフリンピックが開催された年である。そこから本年度は、オリンピック・パラリンピックへの興味関心を高めるというテーマと合わせ、自分たちと違う障害を持つ方々との交流相手として、ろう者との交流をテーマに据えることとした。

本校に在籍する生徒は知的障害があるため、うまくコミュニケーションが取れなかったり、見通しが持てなくて落ち着きをなくしてしまい、交流会に参加できなくなってしまうことがある。そのため、今まで交流会を行う際にはゲームやスポーツのような、参加型のイベントを活動の柱として設定をし、交流会を行ってきた。今回のろう者との交流においても、交流活動を円滑に行うための中心的な活動を検討していたところ、デフリンピック開催に先立って行われたイベントで、日本の文化の一つとしてろう者が参加している団体が阿波踊りを披露する機会があった。このイベントから日本の文化である「祭」をテーマに「阿波踊り」を交流の柱にすることによって、より自然な交流の機会が持てると考えた。

実際にろう者が活動している阿波踊りの連とコンタクトをとったところ、練馬区を中心として活動している「だいこん連」の皆さんが交流を快く引き受けてくださり、交流会を実施することとなった。

交流活動としては、阿波踊りを教わり一緒に踊る機会を設け、そこでろうの方々と交流したりコミュニケーションをとったりすることで、自分たちとは違った障害を持つ方々に対する理解を深めることを主と考え、阿波踊り教室の開催を企画した。しかし、一回一緒に活動するだけでは、その場限りの交流になってしまうことが懸念されたため、活動の成果発表の機会を設定し、阿波踊りに継続的に取り組むこととした。そこで本校の学園祭である「大塚祭」のオープニングセレモニーで、中学部三年生が演奏するお囃子に合わせて、高等部の生徒が阿波踊りを披露し、最後は全校の幼児児童生徒、全員で踊るという目標を設定し、本交流の全体計画を立案した。

以下に、全体計画に基づいた各取り組みの報告を記す。

(1) 「だいこん連」の皆さんによる阿波踊り教室の開催

①事前学習 2025年9月2日（火）10:00～10:30

全校参加で行われる月一回開催の全校集会で、阿波踊り・手話の事前学習を行った。

阿波踊りの事前学習では、事前に撮影しておいただいこん連の皆様の踊りを動画で見せたり、「女踊り」「着流し」「お囃子」などの役割があることを伝えたりした。次週に行われる交流会についての案内をし、「だいこん連」の紹介をするとともに、耳が聞こえないろうの方がいらっしゃること、ろうとはどのような状態にあるのか自分の耳を塞いだりして、考える時間を設けた。

手話の事前学習では、高等部の田中教諭が「こんにちは」「ありがとう」「拍手」などといった、交流に必要な言葉や表現について指導を行った。動画を用いて動きを確認し、実際に動作を行いながら練習した。

②阿波踊り教室の開催 2025年9月11日（木）10:00～12:00

前半は体育館でだいこん連の皆様の阿波踊りを鑑賞し、中盤ではお囃子・女踊り・着流し・うちわ・提灯の5グループに分かれて練習を行った。後半は体育館に全員集まり、全員で阿波踊りを楽しんだ。

前半中盤は中学部・高等部を中心に活動を行ったが、幼稚部の幼児も飛び入り参加し、一緒に楽しく踊りを踊った。後半の全体での踊りは小学部の児童も参加し、大変賑やかななか、だいこん連の皆さんと一緒に踊ったり演奏をしたりと、楽しい時間を過ごす様子が観察された。

一方、ろう者との交流は、前半の鑑賞では教師が中心となり「拍手」を表現する動きをおこなっていたが、最後の全体での踊りが終わった後、教師と一緒に手をひらひらとさせ、拍手を表現する児童生徒の様子が確認された。また、グループ練習では通訳の方を通してのコミュニケーションが多かったが、最初の挨拶を教師と一緒に手話で行ったり、お手本の踊りを見せてもらった時に、手で拍手を表現する生徒も見られたりした。

来校した「だいこん連」の皆様は8名、手話通訳2名であり、オリンピック研究教育センター形成費用での招聘を行った。



着流しグループで踊りを教わっている様子

(2) 学園祭における高等部による演舞披露

保健体育の授業において、「阿波踊り」の授業を行った（7時間）。

踊りの難易度を考慮し、本実践ではうちわ・提灯は実施せず、女子は女踊り、男子は着流しと二つのパートに分かれて発表をすることとなった。そのため、男子と女子のグループに分かれ踊りの練習を行った。

練習の中では手が頭の上まで上がらない、中腰の体制が維持できないなど、阿波踊りの基本の姿勢をとることが難しい生徒もいたため、しっかりと姿勢をとることよりも、リズムに合わせて歩くことに重点を置いて取り組んだ。また、リズムを取るための一つの手立てとして、阿波踊りを踊る時にお囃子に合わせてよく歌われる歌を、みんなで歌いながら歩くという練習を行った。

学園祭（大塚祭）における演舞披露では、女踊り用の編笠をオリンピック研究教育センター形成費用で購入し、踊りを披露した。当日はだいこん連でお囃子を担当されている方を同費用で招聘し、中学部三年生と一緒に演奏をしていただいた。

客席の間を花道として、前半は高等部が演武を行った。歌を合図に踊りを始めることで、生徒たちの動きもスムーズになり、練習を積み重ねてきた成果を十分に発揮した。後半は全校で踊ることで人数も多くなり、大きな盛り上がりを見せた。

結果、楽しい学園祭のスタートを、阿波踊りで華やかに飾ることができた。



学園祭における阿波踊りの様子

2) 高等部の取り組み「知的障害に配慮した新しいアダプテッドスポーツ『いもむしラグビー』の開発と実践」

(1) 世界ゆるスポーツ協会考案の「いもむしラグビー」について

いもむしラグビーは、一般社団法人世界ゆるスポーツ協会が開発した「ゆるスポーツ」の一つであり、寝そべった姿勢で行うラグビー型スポーツである。ゆるスポーツとは、年齢や性別、運動能力、障害の有無に関係なく、誰もが楽しめることを目的として考案された新しいスポーツの総称であり、社会課題の解決や多様な人々の参加を促進することを理念としている。

いもむしラグビーは、従来のラグビーのように走ってプレーするのではなく、選手が床に伏せた状態で前進する「ほふく前進」の姿勢でプレーすることの特徴としている。プレーヤーは床を這うように移動しながらボールを運び、相手陣地のゴールラインを越えることで得点を競う。本競技では、プレーヤーがほふく前進で移動するというルールを採用することで、一般的な運動能力の差が競技結果に大きく影響しにくい構造が生まれる。また、日常生活の中で床を這う動作に慣れている車椅子利用者などにとっては、むしろ有利に働く可能性がある。このように、従来のスポーツにおける身体能力の優劣を逆転させる設計がなされている点が特徴である。

いもむしラグビーは、従来のスポーツにおける身体能力中心の価値観を相対化し、多様な身体条件をもつ人々が共に参加できるスポーツの在り方を提示するものである。学校教育においては、運動が苦手な児童生徒の参加意欲を高めるとともに、多様性の理解や他者への配慮を学ぶ教材として活用できる可能性があると考え、新しいアダプテッドスポーツのベースになる競技として本競技を取り上げることとした。

(2) 知的障害に配慮したルールの改変

本校高等部には愛の手帳2度（重度）から4度（軽度）までの、幅広い障害の様相を持つ生徒が在籍している。そのため、世界ゆるスポーツ協会で考案された「いもむしラグビー」のルールを、体育担当の教員間で確認したところ、そのままのルールでは本校で実践することが難しいと想定された。そこで、元のルールとゲームの良さを活かしつつ、知的障害を持つ生徒も楽しく取り組めるようにルールを改変することとした。

①世界ゆるスポーツ協会の定める「いもむしラグビー」の基本ルール

- ・専用のいもむしウェアを装着する。
- ・5対5に分かれ、前後半5分ずつで試合を行う。
- ・基本動作は、ほふく前進か転がるか。
- ・得点は2種類。L字型エリアのトライゾーンにボールを押さえたら2点（いもむしトライ）。スローラインより後ろからボールを転がし、コーンの間、ロープの下を通したら3点（いもむしスロー）。
- ・パスは基本ゴロで前にパスも可。空中パスは後ろのみ可。
- ・ディフェンスはボールを持っているプレーヤーにタッチ（肩から腕）する。タッチされたらボールをパス。5タッチで攻守交替。

・ラフプレーをした場合は、その場でひっくり返って1プレー分「いもむしフリーズ」。

②知的障害に配慮したルールの改変

前述のルールをもとに、以下に示す3つの観点から改変を行った。

・安全性確保のためのルール改変：接触プレーの禁止

本実践では相手に触れないボールを奪わないというルールを設定した。知的障害のある生徒の中には力加減の調整が難しかったり、衝動的に行動してしまったり、他者との距離感の理解が難しいといった特性が見られる場合がある。そのため、接触を伴うプレーは相手を傷つけてしまったり、衝突トラブルを起こしてしまったりなどのリスクを高める可能性がある。したがって、身体接触を排除することで、安全に活動できる環境を確保した。

・認知的負担の軽減：得点方法の単純化

本実践ではゴールエリア（カラーマット）に入れると1点、そして投げて入れる得点はなしというルールとした。知的障害のある生徒は複数のルールを同時に理解することや、状況に応じて判断することが難しい場合がある。そのため得点方法を一つに限定することで、ルール理解を容易にした。さらに、知的障害のある生徒は物事を視覚的に示すことで、状況や内容の理解が深まることが多いという特徴がある。そのため、ゴールをカラーマットにすることで、視覚的にわかりやすくゴール地点（ボールを置くところ）を示すという配慮をした。

・活動の見通しを持たせる工夫：合図によるプレーの区切り

本実践では合図が鳴ったらボールを置くかパスをするというルールを設定した。知的障害のある生徒の中にはタッチされたことに気づけなかったり、タッチをしてパスをさせるというルール自体の理解が難しい人がいたりということが想定された。そのため音による明確な合図を用いることで活動の区切りを理解しやすくした。そして5タッチで攻守交代というルールも理解が難しいことと、さらに5回という数の理解や現在何回タッチしたのかという記憶の保持も難しい生徒もいるため、取り入れないこととした。

③まとめ

以上のように、本実践におけるルール改変は安全性の確保、認知的負担の軽減、活動の見通しの提示という観点から行われたものである。これらの工夫により、知的障害のある生徒にとって、安心して積極的に参加できる体育活動の環境を整えることが可能であると考えた。

(3) 保健体育の授業における実践と球技大会の実施

2026年2月20日の球技大会での実施を目標に、三学期初めから実践に取り組んだ（7時間）。いもむしラグビーは専門のいもむしウェアを着用することになっているが、本校生徒の運動能力を考慮し、キャンプなどで使用する伸縮性の高いインナーシュラフを用いることとし、オリンピック研究教育センター形成費用での導入をした。

「合図がなったらボールを手放す」というルールの合図には、インターバルタイマーを用いて10秒ごとに音が鳴るよう設定をした。タイマーが鳴る前にボールを手放したりパスをしてしまったりする生徒もいたが、タイマーがならないタイミングでのボールの手放しは認めることとし、タイマーがなった時には必ずボールを手放すというルールで統一した。しかしタイマーが突然なると対応できづらいと考えたため、10秒になる3秒前からカウントダウンの音もなるようにタイマーを設定したところ、生徒たちもカウントダウンの音に気づくとパスの相手を探す様子が確認されるようになった。

またゴールであるが、実践当初はゴールとして認知しやすい方が良くと考え、ミニサッカーで使ったことのあるミニゴールを用いて行っていた。しかし、ゴールを見るとどうしても投げ入れなくなってしまうのか、投げてゴールに入れようとする生徒が多く見られたため、ラグビーという競技の内容に則って競技を行うために、ゴールエリアにカラーマットを置いてそこにトライをするというルールに変更した。すると、ボールを投げ入れようとする生徒はほぼいなくなり、全員がマットにボールを置く（トライする）ことを認識し、ゲームに取り組めるようになった。



【いもむしラグビーのルール】

●一試合4クォーター（1クォーター3分）

●総得点の合計で競います。

●ゴールエリア（マット）にトライすると一点、投げて入れるのはなし。

●移動は、ほふく前進か、ころがる（寝転がった状態でプレーする）。

●合図がなったら、ボールを置くか、パスをする。

●相手に触らない。

●相手が持っているボールを奪ってはいけない。

★ケガがないように、ルールをまもり、フェアプレイをしましょう！

生徒に配布したルールブック

移動の自由度については、実践を進めるにつれ、ほふく前進はスピードが出ないが自分の行きたい方向に正確に進むことができる、寝転がって転がるのはスピードが出るが方向が定まらないという特徴があることに気づき、自分の得意な方法を見つける生徒や、状況に応じて使い分ける生徒なども出てきた。

また安全面への配慮についても、身体接触がファールであることを認識できると、ほぼ身体接触はなくなり、安全に競技を進めることができた。本ルールの基では、相手からボールを奪うチャンスは、10秒ごとにパスをするタイミングであるが、そのことに気づき効果的に相手からボールを奪い得点する生徒も見られるようになった。

球技大会当日は白熱した試合が展開され、参観した保護者からも「ラグビーの、ルールを理解して、お友達とゴールを攻める姿に、成長をかんじました」「いもむしラグビーでは子どもたちが、頭を使って作戦を考えていたのが素敵でした」などの感想をいただくことができた。



いもむしラグビーの様子

3. 成果と課題

(1) 成果

本実践を通して、以下の3点において成果が認められた。

第一に、スポーツおよび文化活動への興味関心の向上である。阿波踊りの実践では、事前学習から本番の発表まで段階的に活動を積み重ねることで、幼児児童生徒が主体的に活動へ参加する姿が多く見られた。特に、音楽やリズムに合わせて身体を動かす経験を通して、運動に対する心理的ハードルが低減し、楽しみながら参加する様子が確認された。また、学園祭という明確な目標設定により、学習の見通しが持ちやすくなり、継続的な意欲の向上につながった。

第二に、異なる障害をもつ他者への理解とコミュニケーションの広がりである。ろう者との交流では、手話や視覚的な表現を通したコミュニケーションを体験することで、「聞こえない」という障害の特性を実感的に理解する機会となった。交流当初は教師の支援に依存していた児童生徒も、活動の後半には自ら手話を用いたり、視覚的な拍手表現を行ったりする姿が見られ、主体的な関わりが生まれた点は大きな成果である。

第三に、知的障害に配慮したアダプテッドスポーツの有効性の検証である。「いもむしラグビー」のルール改変により、安全性を確保しながら全ての生徒が参加できる環境を実現できた。特に、得点方法の単純化や合図による活動の区切りといった工夫は、ルール理解を促進し、ゲームへの主体的参加を支えた。球技大会においては、作戦を考えたり協力してプレーしたりする様子が確認され、基礎的運動能力のみならず、思考力や協働性の育成にも寄与したと考えられる。

(2) 課題

一方で、以下のような課題も明らかとなった。

第一に、活動内容の個別最適化のさらなる充実である。本実践では全校的な取り組みとして実施したため、障害の程度や発

達段階の差に対する個別の配慮が十分とは言えない場面も見られた。特に、阿波踊りにおいては姿勢保持やリズムの理解が難しい生徒もあり、より細やかな段階的指導や支援方法の工夫が求められる。

第二に、交流の継続性と発展性の確保である。今回のろう者との交流は、事前学習や発表の場を設定することで一定の連続性を持たせることができたが、長期的・継続的な関係構築には至っていない。今後は単発的な交流に留まらず、定期的な交流機会の設定や、日常的な学習への位置付けを検討する必要がある。

第三に、アダプテッドスポーツのさらなる改善と普及の可能性である。「いもむしラグビー」は有効な実践であった一方で、用具（インナーシュラフ）の準備や環境設定に一定の条件が必要であること、またルール理解に個人差が見られることなどの課題も明らかとなった。今後は、より簡便に実施可能な形への改善や、他校への展開を視野に入れたルールの整理・標準化が求められる。

(3) まとめ

本実践は、阿波踊りという文化活動と、知的障害に配慮した新たなアダプテッドスポーツの開発・実践を組み合わせること、スポーツへの興味関心の向上、他者理解の深化、主体的な運動参加の促進といった多面的な教育的効果を示した。一方で、個別化・継続性・評価の在り方といった課題も明らかとなった。

今後はこれらの課題を踏まえ、より持続可能で発展的な実践へとつなげていくことが求められる。

令和7年度 附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践報告

附属桐が丘特別支援学校 実践報告1 原 怜子

実践報告2 永田 悠祐

実践報告3 福西 八光

当校では、肢体不自由のある児童生徒の障害特性を踏まえた各教科の実践を行っており、体育科の授業においては、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する力を育むことを目指し、授業づくりを行っている。肢体不自由のある児童生徒の実態は、運動面だけでなく認知面においても多様であり、一人一人の状態に応じた指導や手立て・配慮の工夫を検討し、児童生徒の学びを積み重ねることを目指している。

今年度のオリンピック・パラリンピック事業においては、3つの大きな活動を設定し、実施した。それぞれの活動を通して、各児童生徒が自分なりの方法でアダプテッドスポーツやパラスポーツへの理解や興味を深めたり、障害の重い児童生徒が様々な身体感覚を味わうことを通して、運動やスポーツの楽しみ方をひろげたりすることを目指して行った実践を報告する。

実践報告1：アダプテッドスポーツ、アダプテッドスポーツ講習会

本校における実践では、昨年度より教育課程上の特別活動（体育的行事）について、「運動会」から「桐が丘スポーツ大会」と名称が変更となり、昨年度に引き続き全校でアダプテッドスポーツを体験することが企画された。小中高の各学部に在籍する児童生徒を体験希望種目のアンケートをもとに振り分け、「ボッチャ」「スポーツウエルネス吹矢（写真1）」「卓球パレー」「シッティングバレー」「ディスクゴルフ（写真2）」「Tボール」の6種目のうち2種目に参加することとした。

今まで経験したことがない種目や難しいそうで自信が持てない種目であっても、扱いやすい道具で参加することを体験し、「もう少しやってみたい」「あの種目も挑戦してみたい」といった意欲が芽生え、自分から、どれに参加してみたいかを選択する姿があちこちで見られた。



写真1 スポーツウエルネス吹矢を行う様子



写真2 ディスクゴルフを行う様子

「桐が丘スポーツ大会」当日を迎えるまでに専門家（元筑波大学体育系教授、松原豊氏）を招聘し、予行時に児童生徒並びに保護者、教職員を対象に松原氏による講演を開催した。

講演では、アダプテッドスポーツの考え方や様々な人々の参加を可能とする視点から、競技内容や用具、ルール等の工夫についてお話しいただいた。また、肢体不自由と異なる障害種別の人々にどのように支援すれば、一緒にスポーツを楽しめるかを実際に用具を使用して考えさせるなど、児童生徒が主体的にアダプテッドスポーツに取り組める考え方を指導いただいた。

アダプテッドスポーツの講演や体験を通して、生徒たちの関心が高まる様子をうかがうことができた。

そうした姿を踏まえ、年齢や障害の状態が多様な児童生徒みんなが参加し、楽しめるスポーツを考案することとした。中学



写真3 講演の様子



写真4 障害種の異なる人とスポーツを楽しむ方法を検討する様子

部・高等部生徒の中から実行委員会を編成し、「みんなで考えたアダプテッドスポーツ」の企画を実施した。実行委員の生徒は、自分ならばどのようなルールだと参加しやすいかということを糸口にして、小学部から高等部まで色々な実態の児童生徒が、それぞれの方法で参加し楽しめるよう、競技方法、ルールを工夫した「風船バレー（写真5）」「なんでもドッジボール（写真6）」の競技を考案し、全校児童生徒で実施した。



写真5 風船バレー



写真6 なんでもドッジボール

桐が丘スポーツ大会当日は、学部を越えて児童生徒がグループを作り、大きな歓声とともにスポーツを楽しむ姿が見られ、実行委員の生徒たちは、自分たちでアダプテッドスポーツを考えることの手ごたえを感じることができた。

実践報告2：中学部・高等部生徒を対象としたターゲット型授業（モルック）

本校の中学部3年生と高等部1年生の生徒を対象として、モルックを活用したターゲット型の授業を行った。当校でのこれまでの取り組みとして、パラリンピック種目であるボッチャは授業に加え、桐が丘スポーツ大会や部活動等でも実施する機会が多くあった。しかしながら、モルックはなじみのないスポーツであり、初めて見たり体験したりする生徒たちの興味や関心を引き出すことができた。（写真7）

授業では、モルックについての紹介動画で投げ方やゲームの進め方を確認し、生徒同士で話し合いながら、手投げやボッチャのランプを使って転がすなど、それぞれの障害に応じた投球方法を考えることができた。また、ゲームの進行中には、チームでねらう得点や倒したい本数を話し合う場面がよく見られ、自己の考えを仲間に伝える力を育むことができた。ボッチャと違い、回数を重ねる度にねらうターゲットが遠くなる難しさやモルックを投げる力加減に苦戦しつつも楽しむ様子が印象的だった。（写真8）



写真7 ターゲットに集まりカウントする様子



写真8 モルックを行う様子

実践報告3：施設併設学級でのキャスターボードを使った実践

夏季オリンピックでは、2020年の東京大会からスケートボードが正式種目となり、冬季オリンピック・パラリンピックでは、スキーやスノーボード、ボブスレー等、数多くの滑走系の競技が行われている。しかし、滑走系の運動は体育の授業で取り扱われることは決して多くはない。そこで、オリンピック・パラリンピック教育の一環として、施設併設学級では滑走系の運動を教材とした実践を行った。体育科の授業では「体づくり運動遊び」（小学部1段階）もしくは、「体づくり運動」（小学部2段階・3段階）として取り扱った。

施設併設学級には、肢体不自由と知的障害を併せ有する障害の重い子供が多く在籍している。その中には、座位姿勢の保持が困難な児童生徒もいる。そこで、本学の附属学校オリパラ教育事業の予算から連結できる台車を購入し、その台車にクッションチェアを装着し、座位姿勢の保持が困難な児童生徒も安定して乗れるキャスターボードを作成した。

実践は6月に開催されたスポーツデーとその前後の授業で行った。児童生徒は、キャスターボードに乗り、スケートボードのようにバンク（坂）を乗り越えたり（写真9）、スノーボードのターンのようにドリフトしながら体育館を走ったりするなどして滑走系の運動の楽しさを体感した。当初は重心が急に傾くことに驚いた様子の児童生徒もいたが、運動に慣れてくるとバンクを乗り越える動きにあわせて上半身を動かしたり、繰り返しを求めたりする様子が見られるようになった。また、一人で滑走するだけではなく、キャスターボードとキャスターボードを連結させてコーヒークップのように友達と回転運動を行えるようにするなど、運動の楽しみ方を広げられるように展開を工夫した（写真10）。

年度末に1年間で楽しかった思い出を尋ねると「スポーツデーで、〇〇ちゃんと、しゅーんってしたこと」とキャスターボードのことを挙げる生徒がいたり、学級活動の時間にキャスターボードに乗って運動を楽しむクラスがあったりするなど、障害の重い子供であっても、用具や場の工夫をすることで滑走系の運動の楽しさを感じられるよう実践を行うことができた。今後も、障害の重い子供達が様々な運動感覚を活用して運動の楽しさに触れ、運動への興味や関心を広げられるよう実践を行っていきたい。



写真9 キャスターボードに乗ってバンク（坂）を乗り越えている様子



写真10 キャスターボードを連結させて回転を楽しむ様子

小学部におけるパラスポーツ「ゴールボール体験会」に関する取組

附属久里浜特別支援学校 石川 千尋

I. はじめに

本校は知的障害を伴う自閉症の幼児児童が在籍している特別支援学校であり、幼稚部と小学部を設置している。小学部では、運動会やマラソン大会など、児童同士で同じ場を共有しながら、目標に向かって学習に取り組む活動が多く設定されている。児童一人一人が自ら取り組むべきことが分かり、主体的に学習に向かうことを目指し、指導内容及び方法を検討しながら教育活動を行っている。

近年、オリンピック・パラリンピック教育は、スポーツを通して児童の心身の発達を促すとともに、多様性の尊重や共生社会の実現に向けた態度を育成する教育として、学校教育において重要な役割を担っている。本校においても、これまで、児童がスポーツに親しみ、体を動かすことの楽しさを感じるとともに、友達や教師と同じ場を共有しながら活動する経験を重視し、オリンピック・パラリンピック教育に取り組んできた。

II. オリンピック・パラリンピック教育の実施内容

今年度のオリンピック・パラリンピック教育では、外部講師を招き、小学部児童を対象にパラリンピック競技の一つであるゴールボールを取り上げた。

ゴールボールは、視覚障害のある方のために考案された競技であり、音を頼りにボールを投げたり止めたりして得点を競う特徴がある。本校に在籍する児童がゴールボールという競技を体験することで、児童が普段とは異なる感覚を意識しながら体を動かす経験ができるとともに、障害に応じたスポーツの在り方や工夫について知るきっかけとなると考えた。

本取組では、児童が競技について知り、実際に体験することを通して、スポーツをすることの楽しさを感じるとともに、多様なスポーツの在り方や障害理解への気づきを得ることを主な目的とした。

III. 具体的な取組

1. 事前学習（体育の実践）

(1) 指導の工夫

事前学習は、各学級の体育の授業において実施した。ゴールボール体験会に向けて、児童が競技の特徴や活動内容を事前に知り、安心して当日の活動に参加することをねらいとした。

事前学習では、ボールの中に鈴が入っていることや、音を手掛かりに活動することについて、映像や実物を用いて分かりやすく説明した。また、アイシェードを実際に装着し、視覚情報が制限された状態を体験したりその状態で体を動かしたりする活動を取り入れた。児童の実態に応じて、友達の様子を見ながら同じように挑戦したり、教師と一緒に活動したりするなど、無理なく体験できるよう配慮した。

(2) 児童の様子

ゴールボールは、大きく重さのあるボールを使用するため、両手で持ち上げようとしてもうまく持ち上がらず「重い!」と言うなど、普段使用しているボールとの違いに気づき、言葉で表現していた。また、鈴の音が鳴るボールに興味を示し、音のする方向に意識を向けながら活動に取り組む様子が見られた。ボールを転がすことを意識付けることができるように、教師が手本を見せて一緒に行った後、的を倒すことを楽しむボウリングゲームに取り組んだ。両手を使って勢いよく前方に押し出す動きができるようになり、進む方向を調整しながらボールを転がす児童もいた。アイシェード体験では、慣れない用具を身に付けることに不安を感じる児童もいたものの、自分から手に取り実際に装着し、目の前が見えない状態になるという普段感じるものが少ない感覚を楽しむ児童もいた。

事前に競技の特徴を知り、簡単な体験を重ねたことで、当日の体験会に対する見通しをもつことができ、活動への意欲につながったと考えられる。



事前学習におけるアイシェード体験



ボールを転がす動きに親しむ活動



2. ゴールボール体験会（特別活動の実践）

(1) 指導の工夫

ゴールボール体験会は、順天堂大学スポーツ健康科学部准教授の村上祐介先生を外部講師として招き、特別活動として実施した。低学年と高学年に分けて時間を設定し、それぞれの発達段階や実態に応じた内容を行った。

活動は、ボールに親しむ運動から始め、シュートやセーブの体験へと段階的に進めた。低学年では、教師や友達と一緒に輪になってボールを転がすなど、楽しみながら参加できる活動を中心とした。高学年では、友達の名前を呼んでからパスを出す、友達同士でシュートとセーブを体験するなど、人との関わりを意識した活動も取り入れた。また、アイシェードを用いた体験では、全員に着用させるのではなく、児童の様子を見ながら、挑戦させる形をとった。



小学部低学年（1～3年生）の様子



小学部高学年（4～6年生）の様子

(2) 児童の様子

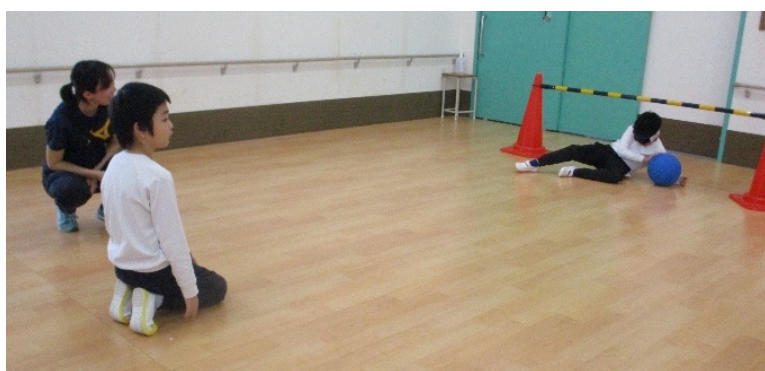
低学年の児童は、教師と一緒に体を動かしながら、ボールを転がしたり止めたりする活動を楽しむ様子が見られた。事前学習で使用する用具に親しんでいたこともあり、初めての活動にも落ち着いて参加する姿が多く見られた。講師が手足を大きく伸ばしてボールを止める「エビぞり」という動きに興味を示し、まねして体を動かしたり、「エビぞり」をして繰り返しボールを止めたりすることを楽しむ児童もいた。

高学年の児童は、ボールの音に注意を向けながら、投げる方向を工夫したり、友達と声を掛け合ったりする様子が見られた。代表児童が教師と対戦する場面では、仲間を応援する姿も見られ、活動全体を通して一体感が生まれていた。また、アイシェードを装着した状態でボールを止めることに挑戦する児童も複数いた。音に集中しやすい環境を整えることは難しかったが、教師の「静かに。」という合図を見聞きして、声を出すことを控えようとするなど、ゴールボール特有の配慮である「クワイエットブリーズ」についても体験的に学ぶことができた。

全体を通して、競技を体験する中で、児童は音を頼りに体を動かす難しさや面白さを感じながら、意欲的に取り組んでいた。



隣の友達に渡したり輪になって転がしたりする、ボールを使った運動の様子



アイシェードを装着して、鈴の音を手掛かりボールを止める様子



児童対教師で、ボールを止める対決をする様子

IV. 成果と課題

1. 成果

今回は、児童がゴールボールという競技を知り、実際に体験することを通して、スポーツをすることの楽しさや多様なスポーツの在り方に触れることを目的として取り組んだ。

低学年の児童においては、教師と一緒に安心して活動に参加し、体を動かすことそのものを楽しむ姿が多く見られた。高学年の児童においては、友達の名前を呼んでからパスを出したり、投げる方向を工夫したりするなど、活動の内容を理解した上で主体的に取り組む様子が見られた。また、鈴の音を頼りにボールの位置を捉えようとしたり、静かな環境を意識して声を控えたりする姿が見られるなど、視覚以外の感覚を用いて行うスポーツの特徴や、障害に応じて工夫された競技の在り方に児童なりに気付く様子が見られた。こうした体験を通して、スポーツには様々な方法や楽しみ方があることに触れる機会となった。

これらの取組から、競技の特徴や活動内容を児童の実態に応じて段階的に設定し、体験を重ねることで、児童が意欲的に活動に取り組み、教師や友達と一緒に体を動かすことの楽しさを感じられることが分かった。

2. 課題

ゴールボールの体験を通して、児童は競技の面白さを実感することができたが、その体験を言葉で振り返ったり、「なぜボールの音が必要なのか」や「なぜ静かな環境が求められるのか」といった競技の背景や意義まで考えを深めたりする学習には十分につなげることができなかった。また、競技体験に重点を置いた取組となったため、実際のパラリンピックの試合や選手の姿に触れる機会が限られていた。オリンピック・パラリンピック教育として、競技体験と大会や選手に関する学びとを、より意図的に関連付けていく必要があると考えられる。

3. 次年度に向けて

次年度以降は、今回の取組で得られた成果を生かし、競技体験に加えて、映像資料や写真等を用いて実際の大会や選手の姿に触れる機会を設けるなど、学びを広げる工夫を行っていきたい。

また、本校に在籍する児童の実態に応じながら、オリンピック・パラリンピックに関連するさまざまな種目を取り上げ、体を動かす遊びや運動には多様なやり方や楽しみ方があることを、実際の体験を通して学べるよう、引き続き指導内容や方法を工夫していきたい。

○参考文献

- ・文部科学省（平成 30 年 3 月）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）

オリンピック教育 vol.14 2025/04-2026/03

2026 年 7 月発行

発行者 筑波大学オリンピック研究教育センター / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
発行所 〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学グローバルスポーツイノベーション（GSI）棟204
